

以下の六つの論文は東京藝術大学の高橋亨先生のお陰で2007年八月から、2008年一月まで“剣窓”(全日本剣道連盟の月刊誌)で発表された。

## 21世紀の剣道の冒険

ステファン・メーダー

東京藝術大学

序文：

剣道および日本の代表的な剣道家との出会いは、外国人にとって、それぞれの文化的背景に新しい見方を与え得るものである。故に、ドイツ南部の黒い森の高地ほど遠く離れた立場から現在の諸問題に対する剣道の意義を再評価しようという試みを、感謝の意を込めてここに提出する。

剣道に関して何度か会話をした中で、筆者はその師である東京藝術大学剣道・解剖学教授高橋亨氏から、伝統的な剣道が熱心な剣道家にとってのみならず現代社会全体に対して持ち得る可能性について、感じたところを書いてみてはどうかと勧められた。競技としての現在の地位を越える剣道のいろいろな面について、外国人として述べるなどおこがましいと思われるかもしれない。「空き樽は音が高い」(ある極意について語る者はその極意について知らない、ある極意を知る者はそれについて語らない)という諺は、実際東西の宗教的・哲学的概念の多くについても当てはまる。だから武道、中でも剣道の精神の深さに言及した外国の出版物の大部分は、いつも非常に表面的であると同時に曖昧なのである。また一方で、日本国内において剣道がもたらした、より広範に及ぶ恩恵に関する貴重な経験と知識は、剣道が次第に一般的な勝負事に退歩していくことを相殺するには至らなかった。従って、伝統的な剣道の特徴に関する外部からの見解というものは次のようなことになるかもしれない。すなわち、外国人が少しも理解できないという意味で剣道が独特であると見なされるべきならば、

ここに示す考えはまったく役に立たず無視されるものとなる。しかし、伝統的な剣道が国際的な規模で好意的な交流の手段として理解されるべきならば、足りない部分や解釈の誤りがあったとしても、本論文がそのための小さな貢献として受け入れられるかもしれない。日本の剣道の有意義な普及を真に目指す時、剣道をさらに現代のスポーツの概念に合わせることは易きにつくことを意味する。西洋社会および現代日本において衰退している騎士道的な共存の価値観を守り後世に伝えていくために、それは避けるべきである。

歴史的研究の最終目的は、現在の要求に的確に対応するために過去から学ぶことであると常に教えられてきた。過去のほとんどの社会のように、多くの歴史的教訓にあまり従わない現代社会の風潮に反して、主に尊敬の美徳の上に築かれた剣道の伝統は今でも生きている。尊敬の美徳は、稽古前から稽古後に至るまで礼法を守ることに表れている。これは互いの尊敬する相手、道場にいる先生方、そして剣道の先達に対して行われることである。従って日本の「稽古」という言葉には、前の世代の剣士の精神で稽古をすることが含まれる。刀で相手を斬り殺す術が、互いに自分の人格と相手の人格を磨き高める武道に変わったのは彼らの努力のおかげなのである。

名誉、自己鍛練、尊敬といった言葉が現代語においてあまり使われなくなってきた理由として、ドイツと日本の歴史における暗黒時代にそれらが誤用・曲解されてきた事情が挙げられることがあるが、同時に思いやり、謙虚さ、公平さといったあまり権威的ではない言葉も人々の意識から静かに消え行く傾向がある。これらの言葉は、自称文明社会での生き方を楽にする基本的価値観のうちの6つでしかないけれども、これら6つの失われつつある美徳と、勝ちを取ることも深い意味のある剣道との関係はどこにあるのだろうか。それについてはこう言えるかもしれない。

名誉を重んじる心なくして、思いやりはあり得ない。

自己鍛練なくして、謙虚さはあり得ない。

尊敬なくして、公平さはあり得ない。

このことは、剣道のみならず、家庭生活から芸術、近代科学、経済、政治、国際紛争に及ぶ生活の様々な面にも当てはまる。武道としての剣道は、西洋の考え方と相容れないように思われる多様な特徴と美德を併せ持っている。とはいえ、矛盾と思われることは真剣な稽古により克服可能である。要するに剣道では、資格を有する先生の指導の下で生き方の基本原則の意味を身をもって知ることができ、その結果、頭だけまたは体だけで理解するよりもはるかに包括的な理解が得られるのである。

まず自分自身に全身全霊で挑み、それから相手に挑む。日本で何世紀にも渡って伝えられてきた剣道が世界中の学び、理解、教えの近代的概念に意義を申し立てそれを高めるといふ展望は素晴らしいものではないだろうか。倫理的進歩の主な障害についてはレオ・ペルッツの 1923 年の著作に次のように詳しく述べられている。

「今では皆戦争をなくしたいと願っている」ふたたび話をはじめた。「戦争をなくする！ それでどうなるというんです？ あそこのあれだって」彼は人差し指でリボルバーを指した。「なくすつもりなんではなかね？ あの手のものは数限りなくある。でもそれでどうなるというんです？ 人間の悪意までなくなるわけじゃないし、悪意こそすべての凶器の中でもっとも残忍なものだというのに」

( 出典：『最後の審判の巨匠』 レオ・ペルッツ著 ミュンヘン 1923 年、DTV 出版 第 4 版 2007 年 57 頁より引用・翻訳 )

この障害に対処するために剣道の普及はどんな貢献ができるだろうか。もちろん意味のある剣道を外国人にとって近づきやすい存在にする方法はいくつかある。そのうちの 1 つは、かつて日本、中国、インド、ペルシア、欧州などにおいて共通であった、文武両道の観念と上記の 6 つの基本的価値観の再評価だろう。それらの価値観は、それぞれの宗教によって変わるものではない。今日

これらの価値は、相互尊重の精神に基づく平和的共存および交流という目標を目指す、基本的な礼儀作法の規範としての役割を実際に果すかもしれない。綿密な哲学的・宗教的アプローチは過去 2500 年間、この目標に近づくことができなかった。歴史を通して、哲学的・宗教的・政治的概念は、最終的に大規模な攻撃の口実となる傾向がある。従ってそれを逆にして、攻撃から始まり、代表的な素晴らしい剣道家たちによって好意的に互いを高め合う道へと変わった武道の妥当性を評価してはどうか。21 世紀の剣道の冒険はそこから始まる。

## 21 世紀の剣道の冒険 ( 2 )

### 刀剣の原理研究による科学の向上 - ( 第 1 部 : 基本的考え方 )

剣道が内包する可能性は、国際社会の中で教育的価値観を伝達すること、あるいは西洋スポーツとは異なる競技スポーツを普及させることに限られない。独自の文化的資産として、日本国内外において様々な形で科学的研究に貢献できると期待される。剣道が持つ様々な原理は、国際刀剣研究の総合的体系を開発する基礎を与える事が出来る。なぜ日本刀が世界の他の刀剣より優れていると言われるのか。驚いたことに、その質問について直接比較した科学的な研究は現存していなかった。日本刀と竹刀の関係に関連して、両者に共通する 2 つの基本要素を見てみたい。伝統的剣術と現代の居合道において切り込み角度がきわめて重要であることを考えると、剣道における真剣のむね(棟)に相当する竹刀のつる(弦)の意味がよくわかる。これを念頭に置けば、竹刀を単なる「竹の棒」ではなく、刀と考える必要性があるのは明らかである。現代の剣道に残されている刀のもう 1 つの基本的な要素は、「物打ち」、つまり切り込んだときにあたる部分を正確に使うことである。物打ちと切り込み角度は、ヨーロッパの刀剣では軽んじられているが、それでもなお科学的評価における重要なポイントである。上記の原理、ならびに 2 人の剣士の間合いの重要性は、剣道だけでなく、世界中の切って突くスタイルの伝統的剣術にあてはまる。

しかしこのような剣技の基本は、日本、あるいは他の文化圏における古代の刀剣の技術的・文化的意味ばかりを重視する大半の学者からは省みられない。同

時に、若い剣道家の多くが、ヨーロッパの刀剣は言うに及ばず、日本刀についても基本的知識さえ持っていないのは驚くべきことである。実際問題として、世界の刀剣と剣技に関する総合的理解について言えば、私たちは「木を見て、森を見ない」状態になった。これは、考古学、材料科学、および伝統的な日本刀鑑定のそれぞれの目的を考えるとよく分かる。考古学研究はおおむね類型学的調査しか行わず、現代の材料科学は鋼の種類のみを研究する。日本刀鑑定だけが、昔の職人と剣士にも可能であった実用的な視点からの情報を提供する。鑑定法、考古学、および最新材料科学の研究結果を比較すると、次のようなことがわかる。刀作りの様々な流派の個性は、刀の形でも微細構造でもなく、研磨された表面にこそ表れる。従って、様々な文化圏における昔の製鋼技術のレベルを評価するのに、日本の伝統的な刀の鑑定方法がきわめて重要となる。

鑑定方法の起源は 1000 年ほど昔に遡り、江戸時代( 1600/1603 - 1867 ) はじめ頃から洗練されるようになった。剣道が生死をかけた戦いから人間性を磨く道へと進化するとともに、日本刀の鑑定も、武器としての刀の評価から芸術品としての評価システムに発展した。日本刀の世界的評価を理解する上で重要なのは、現代まで磨ぎ師の技が残っていることである。この技術が生き残っていなければ、日本刀に地肌や刃文が現れることはなく、西洋の美術館に保存されている刀のような情けない姿になっていたであろう。何世紀にもわたるさびがついたままか、荒っぽい研ぎ方で不恰好にさびを落とした状態で。実際、日本刀の研磨技術と、鑑定方法が合わさることにより、独立して高度に専門的な近代材料科学の先駆者となっている。

このことを認識した私は、刀剣の研ぎ師の技について学び、ばらばらにした中世初期のヨーロッパの刀剣を日本で研いでもらおうと決心した。そうすれば、この美術の鑑定に対する日本の由緒ある手法が、現代の科学的分析より優れていることが、国際的規模ではじめて立証されるであろうと思ったからである。この国際的刀剣研究が深めれば、間違いなく「森が見える」状態になる事を確信している。日本刀の鑑定方法を西洋の刀剣に応用したいいくつかの結果を次号で紹介する。

( つづく )

## 2 1世紀の剣道の冒険 ( 3 )

### 刀剣の原理研究による科学の向上—(第2部：応用と結果)

熱心な剣道家にとっては当たり前のことだが、刀操法の法則を考えずに刀剣を研究することは、書き方を知らずにペンを研究するようなものである。逆もまた然りで、日本刀並びにその歴史と技術に関する知識を持たずに剣道の稽古に励めば、とんでもなく誤った考えに到達することになると言えよう。刀剣の研究と剣道を生涯続けた人物の素晴らしい例が、刀剣博物館の創設者であり国学院大学の剣道の師範であった佐藤寒山先生である。戦後 GHQ により日本刀が芸術品として認められるようになったのは彼の努力によるものであった。これにより何十万もの優れた作品が溶解炉での破壊から文字通り救われた。

今日の剣道の先駆者たちはまだ、きちんと真剣を扱っていた。日本の剣道と西洋の剣術の、国際的な直接比較を考慮した最初の本の出版は、中山博道先生の功勞である<sup>1</sup>。その剣道とヨーロッパ式剣術との共通点と相違点、それが、ヨーロッパと日本における刀剣と剣術に関する現在の国際的な研究結果の一部を紹介することを私に促した。中山先生の本でさえヨーロッパの刀剣と剣術に関する偏見を取り除くことはできなかったのだから、この論文でその状況が少し

---

<sup>1</sup> 中山博道、中山善道：日本剣道と西洋剣技（東京、昭和12年）。

変わるかもしれないということは望むべくもないが。

私が日本に持ってきたヨーロッパの刀剣は、日本の古墳時代にあたる紀元6世紀のものであった。それらを研いだ埼玉県三郷市の美術刀剣研ぎ師、佐々木卓氏が驚いていたが、それらは日本刀と同種の地肌を呈していた。研磨面には、柂目肌、板目肌、木目肌が様々に組み合わせられて現れていた。この発見は、新潟県の刀匠であり人間国宝である天田昭次にとっては驚くことではなかった。彼は、西洋および日本の科学者とは対照的に、ヨーロッパの鋼も折り返し鍛錬を繰り返す以外の方法では精練できないことをよく知っていたからである。この結果から、刀剣の研磨と鑑定という日本の伝統的な体系には、ヨーロッパの刀剣を分類する無限の可能性があることがわかった。研磨とその後の鑑定という優れた日本の方法を応用することにより、今までヨーロッパの考古学の方法では区別できなかった刀剣についても、作品の様々な流派を調べることが可能になる。日本刀とは異なり、これまでに研がれたヨーロッパの刀剣には複雑な刃文は見られない。とはいえ、焼き入れによって生じる働きは、少なくともローマ時代以降のヨーロッパの刀剣にはっきり見られる。日本刀に比べてヨーロッパの騎士の剣は重く不格好であるというのは偏見である。もうこのような考えは、作り話として脇へ置いておこう。中世のヨーロッパの刀剣の幅は日本刀の2倍あるものが多いというのは事実だが、その一方で厚みは約半分しかない。したがって、片手で扱う騎士の剣の重量が1.4 kgを超えることはまれである。14世紀から16世紀にかけてよく見られる両手で扱う刀剣の重量は、1.6 kg

をはるかに下回ることがしばしばあった。試し切りや居合道の稽古に使われる日本刀が、1.5 KG を超えることはほとんどない。騎士の剣の刀身のバランスを取っているのは柄頭であり、柄頭は、現代の胴張り竹刀のように、握りの近くに重心位置を持ってくるのに役立つ物であった。実際優れたヨーロッパの剣は優れた日本刀と同じくらいバランスが取れているように感じられる。ヨーロッパの騎士は7歳から剣の訓練を受けるが、敏捷性が必要な場合 1.5 KG というのは限界の重さである。

今後のアジアとヨーロッパ間の刀剣研究の観点として面白いのは、どちらの文化圏でも、刀剣は蛇や竜および天象と神話・伝説上密接な関連があるという事実である。これらの類似は、スカンジナビア、東ヨーロッパ、そして日本における、竜を退治する者についての神話（それぞれ、竜を退治するジークフリート、竜を退治し貴婦人を救った聖ジョージ、大蛇を退治して貴婦人を救い大蛇の尾から剣を取り出したスサノヲの神話）に表れており、互いに深いつながりがある。これらの神話・伝説の起源は紀元6世紀よりかなり前だと思われる。天象との関連は、中国と日本の初期の刀剣に象眼された星座（例：七星剣 [国宝] 東京国立博物館蔵）およびヨーロッパの剣の刀身に施された三日月形または星形の刻印により明らかになる。人間が初めて使った鉄は隕鉄だったので、紀元前4千年紀に最初に鉄が使われた中東では、それは「天空の金属（SKY-METAL）」と呼ばれた。したがって、初期の鉄冶金の神話・伝説は、スカンジナビアから日本にまで広がっていると言することができる。鋼鉄の刀剣は、



日本でのみならず全古代世界において常に最高レベルの鉄工の技であった。竹刀で剣道の稽古を行うと同時に、刀剣の究極の起源を知る。そのことによって我々は、日本においてのみ暴力的な起源を超越できた古来の伝統を生きられるのである。

( つづく )

## 21世紀の剣道の冒険 ( 5 )

日本の武士道及び西洋の騎士道 - ただ昔話ではないのか

科学的な専門用語に携わると“心の強さ”と言う概念が現れない事を始めて気づいた時に驚きました。煎じ詰めると“技術的か医学的な発達が大分苦勞を重ねた人々のお陰ではないのか”と言う考えが出て来た。剣道の理念の場合にもその原理と異なる発達があったとは明白だと思っています。武道と科学を発展させた先生方の共通点はこれである：独創的な認識を守ると広めるためにぎりぎりまで諦めなかった。この見地から判断すると、発達の基本的な元はただ認識ではなく、その調べた人間には精神あるいは心の強さがあったと（見なさなければならぬ - 言う訳である）。この考えを元にして、今度は比喩的な（ひゆてき）意味で二つの精神史的な現象を発掘させて頂きます。前回取り上げたように、真の強さとは自制心と大いに関係がある。この自制心は、欧州から日本にいたるまで社会の武士階層において体系化されてきた。欧州では騎士道、

また日本では武士道と言われる現象になって来た。今や絶望的な状況や敗れた敵に対する寛大な振る舞いという理想は、東西いずれにおいてもほとんど姿を消してしまった。日本の武道には騎士道精神が一部でまだ残っている。欧米諸国に比べ、日本はまだその文化のルーツと強く結びついている。そのため、他の国では久しく忘れられているような、多くの芸術や工芸が後世に残されてきた。以前挙げた日本刀の例のように、これらは異文化間の研究の為に宝庫である。剣術から剣道への歴史の流れを顧慮すると、日本で倫理的な文化財も現代まで伝わって来た事も明らかになってしまった。従って、武士道や騎士道を現代なりに比較して再評価すれば、剣道という武道にとって倫理的な基盤となりうるだけでなく、現代文明全体の妙な風潮を押しとどめる急ブレーキの役割も果たすことができるだろう。

他方で、伝統的文化が徐々に化けて、経済的必要性という様相を帯びつつあることも否定できない。1900年に新渡戸稲造が海外に紹介した武士道が、その一例である。騎士道の理想がナチスドイツの時代に悪用されたように、武士道の特徴も日本の帝国（国粹）主義の時代に悪用された。だからといって、より礼儀をわきまえた方法で現代の問題に対処しようという武士道の姿勢を無視する口実ととらえてはならない。より前向きで人間臭い特徴を持つこうした武士の心得の遺産は、主に伝統的な武道の一部の擁護者により守られている。彼らは、自分たちの道が単なる「格闘技」に成り下がらないよう奮闘を続けているのだ。

何故に宮本武蔵の“五輪の書”、柳生宗徳の“兵法家伝書”、新渡戸稲造の”武士道“などの翻訳が現代の欧米諸国で人気になって来たのか。第一番目に騎士道の精神的立派な所が日本と異なり本でまとめられなかった。第二番目には西洋のモダン社会の内にも不安定が殖えて来ました。その事は別として、欧州騎士道の現代社会のための可能性を評価出来る為に日本の武士道及び武道の勉強が一つの大事な点であると思っています。歴史学的な研究及び剣道の稽古は現代の社会に好ましい波紋を投(な)げかけなければ、結果として意味のない遊びになる傾向がある。武士道と騎士道の再解釈を目指しながら、剣道の稽古はただ体の運動ではなく、体と心で体験できる生命学だと感じて降ります。こう言う生命学は非常に立派な輸出品にならないでしょうか | なるはずではないだろうか。

国際的な見地から言えば、現代の重要問題への対処にあたり武士道や剣道が持つ教育的な可能性を徹底的に探るべきである。そうすることで私たちは、武力紛争の平和的解決策や、例えば公正取引基準の確立にあたり、ただ一つの「欧米のやり方」を取り入れる以上に確かな貢献ができるだろう。かつてはわび・さびといった洗練された美意識や、慎み、礼儀の立派な手本であった国で、「何を買うかで人となり分かる」といった広告文句を目にするのはまだ稀ではある。しかしその兆しは現れつつある。なんとしてでもライバルや敵をやっつけたいというように価値観が弱体化し、結局、剣道や相撲といった武道の世界でさえリンチ事件のような暴虐な行為が生じてしまう。もっと大きくとらえれば、同じような墮落が近代戦争にも見て取れる。罪のない者の命が奪われても、自分たちの方が道徳的に優れていると主張を続ける政府代表は、これを「巻き添え被害」として一括してしまう。同じことが自称「神の戦士たち」にも言える。科学、寛容、そして騎士道という点でイスラム教が歴史において成し遂げ

てきたことを思えば、その卑怯な攻撃は全く以って侮蔑する他ない。

( つづく )

## 21世紀の剣道の望見 ( 6 )

### 日本の武士道と西洋の騎士道 ( 2 ) 天の大国の最後の侍

「剣道はどうやら古流剣術の墮落した姿に成り下がり、現代的な競技スポーツと化してしまった。」これは、古流派の継承者、フェンシングの研究家、東西の剣道家らの間で根強く頻繁に登場する似通った意見を代表するものだろう。最近復活した15,16世紀のヨーロッパ武術を学ぶ者の間でもよく言われることだ。こうした発言は、剣道に「闘う力」が欠けていることを強調する余り、その精神性、哲学性をなおざりにする傾向がある。例えば、日本では武士道、欧州では騎士道が定めたルールを守ることにより一騎打ちを崇高なものとしていた。どちらも歴史を通して様々に解釈されてきた。しかし、変わらぬことが一つある。それは、文事ある武士は人間としての道義と理想を持つ者として尊敬されていたということだ。学問のある人格(者)というこの基本線は「紳士道」のひとことにまとめられるだろう。

今では、博愛的な理想を追求するなどと言えばむしろ笑われてしまう。事業でも科学でも、理想主義は強さよりも弱さとして冷笑される傾向が目立ってきた。他方で、ゲーム産業やハリウッドでさえ、度量の大きさ、勇気、公平、慎み、寛容さといった一見古臭い理想に対する憧れに応えている。その代表的な

映画がここ数年続けて公開された。高貴な武士や騎士のイメージを今風に解釈した映画、「ラスト・サムライ(最後の侍)」(米、2003年)と「キングダム・オブ・ヘブン(天の大国)」(米西英合作、2005年)だ。史実に忠実かどうかはさておき、いずれも歴史を生きのびてきた武士(騎士)の闘いの流儀に着目している。高潔の士とその理想に焦点をあてることで、狙い通りというよりは思いもかけずもう一つの史実が浮かび上がった。武士(騎士)の流儀に見る博愛性は常にほんの少数により守られ尊重されていたということだ。このとらえ方は、武士道や騎士道のみならず、古代アラブやインドでいう高潔な行為にもあてはまる。

明らかに、これは今の剣道とは何の関係もない、いや、あるのだろうか？精神的な成長や人格形成のために剣の鍛錬を積むという可能性、そして必要性を、16世紀から20世紀の剣士たち(剣術家)は重視してきた。敵を危めることなく剣術の修行に一生を捧げた教養ある剣士の指し示した道を真剣に考えること、あるいはレクリエーション活動として剣道の練習をすることは、前に述べたように両刃の剣の一つとなる。ただ伝統を守らんがために伝統を守ることが肝要なのではない。その生涯において理想が衰退の一途をたどっていることを感じていた山岡鉄舟は、1885年頃、次のように語っている：

「名を馳せ金持ちになりたいという欲求の方が教えを受けたいという願いよりも強くなってしまった。現代科学は利己的な人間には魅力的である。彼らは人間の感情よりは科学的な抽象概念を好むからだ」(以下から引用翻訳：

STEVENS, J.: ZEN-SCHWERTKUNST. DIE MUTÔ-RYÛ-SCHWERTSCHULE DES YAMAOKA TESSHÛ. HEIDELBERG 1995).

今日でも同じことが言えるが、鉄舟の時代よりはるかに多様な状況に該当するだろう。いずれにせよ、その世界を垣間見ることが許された私は、剣道とは結局、人生と博愛の精神を集中的に教えるものなのだと確信している。断固たる意思をもってこの道を進めば、意味のある剣道であればきっと先に述べた傾向に対抗することができるだろう。とりあえずはそう期待することで、現実や仕事の日課さえも刺激的なものとなる。そうすれば、「天の大国の最後の侍」のようなフィクションなど、21 世紀の剣の道で出くわす冒険に比べれば退屈だと言われることだろう。